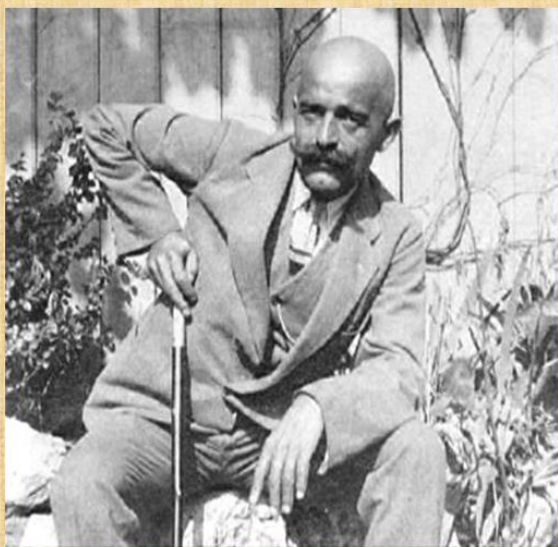


チェコヴィッチの回想録 グルジェフ氏の思い出

SOUVENIRS SUR GEORGII
IVANOVITCH GURDJIEFF

Tchesslav Tchechovitch



第一編
コンスタンチノーブルからベルリンへ
(一九二〇年～一九二二年)

郷 尚文 訳

1921年の出会いより、コンスタンチノーブルからフランス、アメリカに至るまでグルジェフと行動を共にし、28年にわたり親密な関わりを維持した帝政ロシアの元青年士官で、レスリングのチャンピオン、サーカスの力士、手品師などの経歴をもつチェスラヴ・チェコヴィッチが真情をもって振り返るグルジェフの思い出。本書の元となる原稿はチェコヴィッチの死後に長らく行方不明になっていたが、それから40年を経て1990年代に発見され、2003年に発表された。数々の逸話や秘話を散りばめた幻の回想録。

・分量：約6万6千字（単行本換算約100ページ）

・目次

まえがき

I コンスタンチノーブルにて

最初の出会い

祖国を離れたロシア人たちの間で

グルジェフ氏の医術アレクシス・クームの難病

冷水を浴びる

記憶術の伝授

現実に目覚める

グルジェフ氏らのロシア脱出とフィリポヴィッチの物語

小さなアメリカ発見

プリンキポ島でのやりとり

戦争における目覚めた人のふるまい

法則の序列

不死性に関する理論

II ヨーロッパへ

彼のもとへの危険な旅

芸術の値打ち

アレクサンドル・Rの不思議な回復

Amazonストア

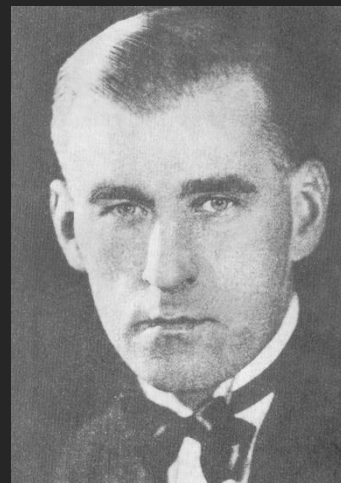
この回想録について

チェスラヴ・チェコヴィッチは、一九二一年にグルジェフに出会って以来、コンスタンチノーブルからフランスに至るまで行動を共にし、二十八年間にわたってグルジェフとの直接的な関わり合いを維持した。

チェコヴィッチは、グルジェフの教えを直接に耳にし、生のさまざまな局面におけるグルジェフの行動と対応を目撃する機会を持った。六十歳を超えてから彼が書いた手記のなかで、彼は、自分の人生はグルジェフに出会ったときに始まったと書いている。

グルジェフの死後、チェコヴィッチは、自分のまわりに生じた小さなグループでの取り組みを主導した。チェコヴィッチの死後四十年を経て本書の元となる遺稿を発見した人物であるミシェル・カリは、本書のフランス語版の冒頭で、チェコヴィッチとの最初の出会いのことを次のように書き記している。

「『彼はロシア人で、じつに興味深い話をする。チェコヴィッチという名前だ。会いに行くといよ』……自分が何を見つけることになるのか知らないまま、私はメトロのサン＝ツワン駅を出た。テニス通りにある質素きわまりないアパートマン。そこでの最初の出会いは私を驚かせた。家具だらけの小さな部屋。厚いバインダーがいくつも置いてあるテーブルを前に、とても大きく強そうな男がいて、とてもソフトな声で私に声をかけてくれた。のちにグルジェフとザルツマン婦人のものとわかった二枚の写真。壁にはほかにも写真や絵が飾られていた。熊のでる深い森林、陽気な人たちの祝宴。まもなく二人きりで、おいしいごちそうを前に、われわれは話した。彼は注意深く私の話を聞いた。私の人生について聞いたあと、彼は、ロシア南部での彼の少年時代について、大きな河、巨大な魚、森について語った。理論的なことは話題にならなかった。彼の語るのを聴きながら、私は彼の途方もない気前のよさと活力を感じた。このあたりではめったに見かけない、ハートの大きな人である……」(抄訳)



チェコヴィッチは、グルジェフの周辺でのグループワークの原型に忠実に、週に三回から四回、自分の小さなアパートマンで集まりを開き、朗読や討議やエクササイズを主導するほか、みずからピアノを演奏し、ふんだんな食事をふるまった。そのための食材を安く買い入れるため、とんでもない時間にルアールの市場を訪れていたという。チェコヴィッチは、自分のまわりに集まった者たちに対して、グルジェフにまつわる思い出を語り、彼らはそれをまとめあげる仕事を引き受けた。

さらに彼は、セーヌ川の無人の中洲に建てた小屋でのフィッシングキャンプなど野外での活動にグループを誘った。彼は釣りの名手であり、日曜の午後、セーヌ下流の釣り場の最寄り駅からパリへと向かう列車に乗った釣り人たちは、ぜんぶで四十キロにもなる魚を背負って乗り込んでくる巨体の男にどぎもを抜かれたという。のちに彼は、観光化される以前のイビザの隣島、フォメンテラ島で夏を過ごすようになった。

不穏なヨーロッパ情勢のなかでこの記録が失われることを恐れ、チェコヴィッチは、フォメンテラ島の友人に本書の元となる原稿を託していた。そしてそれから四十年を経て、その原稿は、この島の小さな白い家の屋根裏で発見されたのだった。